

日本中、いや世界中が新型コロナの騒ぎに覆われている毎日です。今年3回目となる「瑞穂町図書館を使った調べる学習コンクール」は、学校が休校だったり夏休みがとても短かったり、図書館が閉まっていたりしてのマイナス要因があって応募数が激減するかなと思っていましたが、みなさんととても頑張って一般の部や高校生の部を含む多くの作品が集まりました。とてもうれしいことです。ありがとうございます。

今回も応募作はどれも力作でした。本当なら全部の作品の感想や改善点をお話したいところですが時間的に不可能ですので、「推し」の幾つかの作品についてお話ししますね。

まずは応募作全体に関する印象です。

多くの作品は調べたいこと、つまりテーマを先に書いてその答えになるだろう文章をどこかの本やネットから見つけて、そのまま書き写す。というスタイルでした。この書き方では「図書館を使った調べる学習コンクール」でポイントを多く取れません。なぜそのテーマになったのか。そのテーマの何を知らうとしたのかということ、自分以外の他の人にわかるように書きましょう。どのようにすると目的のテーマ内容が調べられるのか。図書館や学校図書館に行ったらどういう行動をとると良いのか。どうしたらほしい情報に行き当たる確率が高くなるのか。知りたいことをどのように解決していったのか。あるいは解決できなかったのか。調べていく過程(プロセス)を丁寧(ていねい)に書くと良いですよ。途中で新しく興味がわいたり、調べにギブアップしたときは、テーマの変更は「あり」ですから、心配しないで方向転換しましょう。最初のテーマ設定に対する見通しが甘かったり、答えだけが先にわかっている、調べ方が結局はわからなかったということかも知れません。自分の頭だけで解決しようとする、多くの場合は失敗します。学校図書館の司書さん、学校の先生、町の図書館の司書さん。そのことについて詳しいと思う専門家の人。などの他人に相談しましょう。大学の先生や NASA や JAXA にメールをして質問や意見を聞いたりした人もよその地域ではいますよ。そして、どんな本を読んだのか。そこに書いてあったことで何がわかったのかを丁寧に書きましょう。本に書いてあったことだけを書かなければ作品にならないということはありません。コンクールのタイトルは「瑞穂町図書館を使った調べる学習コンクール」です。図書館が持つ(学校図書館も同様です)資料だけでなく、機能を活用する事に気づいてほしいというヒントがコンクールの名前に隠れています。作品にはここで、何の本に何が書いてあったかという「出典(しゅつてん)」とありますが情報のあった場所をノートに記録しておきます。君たちの力作である作品を読んだ人は、どのように調べていくと、こういうテーマのことがわかると、作品が調べ方の教科書になるのです。特に、図書というメディアは物さえあればどこに居ても誰が読んでも得られる情報は同じ情報です。インターネットのように朝見たホームページが、夕方にはなくなっていたり、内容が全然違うものになっていたりすることはありません。

そういう意味では、かなり多くの作品が得られた情報の出典が不明でした。何の本を見てそのことがわかったのかということがわかりませんでした。出典を書いていないことは評価の得点につながりません。インターネットで検索して一つか二つのサイトに書いてあったことを書き写してあるという作品もよく見かけます。新型コロナ禍で図書館の利用が

難しかった厳しい状況は値引くとしても、ネット情報を使うときは、ある程度の図書を使って、情報の裏付けを取ってください。そのことによって正しい情報か、あやふやな情報なのかを見極める力がつきます。

「図書館を使った調べる学習コンクール」は、一種のケーススタディ・トレーニングです。このトレーニングを積むことで、物事をいろいろな角度視点で考える力がつきます。どこにどんな情報があるのかと知っていくことができます。世の中にはネットではわからない根本的な問題が多くあります。ネットは確かに便利ですが、新しいことを知っていく力とは少し遠い所にあります。そして確かめようのない情報だけです。

調べる力がつくと言うことは、自分の生涯にわたってのこれからの人生の中で、次々に持ち上がる様々な課題を、少なくとも大きな失敗はしないように解決する力がついて行くということです。

講評のはじめの方に、「自分以外の他人にわかるように書きましょう」と書いたのは他人の頭の中は何を考えているかがわからないからです。自分が何をどのように行動して、その途中でどんなことを感じたり考えたか。そして、結果として何がわかり、どのように思っているのかを丁寧に書かないと相手になかなか伝わりにくいのです。「以心伝心（いしんでんしん）」という言葉はあっても、そういう現象は超能力者でない限り、ありません。

全体に対する講評は、ひとまずこのあたりにして、個別の作品について触れます。

入賞作品の中で気になった、私のイチオシ（本当は三推し？）は、高校生の部『無邪気な感想』時を経て『変化した感想』と、同じく高校生の部「家畜の上下関係について」。一般の部「草木の彩り」です。

『無邪気な感想』…は、奇を衒（てら）ってつけたタイトルなのでしょうが、結果的に損をしていると思います。ストレートに「無邪気から探求への変化」とか、「絵本の牛の種類は何だ！」や「フェルジナンドはホルスタイン？」などのタイトルの方が読み手に「おや？どんな内容なんだろう？」と興味を持たせて作品に誘う力を発揮できますよ。人は精神的にも成長していきますから、同じ作品を時間を空けて読むと、感じるものが違うのは当たり前のことです。さて、この作品の内容をかいつまむと、10年前の幼いときに見ていた絵本の主人公の牛について、農芸高校生となり畜産科で勉強したことによって、主人公の牛の品種は何か？が気になり読み返してみた。すると小学校低学年の時とは全く違う印象を作品から受けたというものです。文章の技巧さにはまだ幼さがあるものの、絵本の牛の品種を推理することを思いつき、その推理方法に、将来の酪農・畜産家として日本を支える彼女の片鱗がうかがえて頼もしく感じました。原産種から改良された。という牛の品種を書いています。どのように改良したのか。何種と何種の特長を併せ持つのか？絵本の挿絵はたぶん母牛と父牛の姿が描かれているけど、推理するにしても少し結論が早過ぎはしないだろうかと思いました。様々な可能性を示して、それらの中から可能性の低いものから消去していきなり、あるいはこの絵本の原著に当たって日本語版と原著が文章も挿絵も同じである確認をとるといっても慎重さもほしいと思います。そもそも流行の「和牛」と外国産牛とは何が違うのかに触れていくと話の内容がもっと広がります。日本に元々牛

がいたのか？日本列島最初の牛はどこからきたのか。スペインの牛と何がどうちがうのかなど専門的知識のない人に教えてくれる作品になるとさらに素晴らしさが出てきますね。

京都の八坂神社には「牛頭天王」という神様がいます。この牛は何種かなと作品を読んでいてふと思いました。応募作品全体に共通して良くない点があります。写真や引用文の出典、参考文献が明記されていないのです。大学も含めて学校のレポート・論文としては減点です。評価しないという先生もいますからね気をつけましょう。

同じく瑞穂農芸高校3年生の作品「家畜の上下関係」も畜産科の生徒ならではの発想の作品です。家畜がコロニーの中でカーストを形成していく時に強さ・優位さを示す行動の様子を描いた作品です。前提で、自分自身はよく知っている「家畜」の定義を、まず共通理解として普通の一般人に示す。そのために国語辞典を引く。という行為はとても良いことですが、高校生ならば10タイトル程度の国語辞典を引き比べてみると新しい発見があるはずです。ペットと家畜は同じなのか違う認識が必要なのかなど、なぜ「家畜」の定義を示すことが必要なのか、その理由を書かないと、せつかくの君の優しい心が伝わりにくいですよ。

偶蹄目というか、ウシ科が例示としては多いのは、家畜という条件の中では必然的なのかも知れませんが、奇蹄目ではウマがありましたか。もっと他の家畜の事例を示すと傾向なり法則なりが出てきたかも知れませんか。私の家では私が生まれる以前から代々、ネコを飼っています。ネコという動物は群れを作る種類ではありませんが、兄弟や親子で飼うととても仲良く生活をする動物だと思っています。兄弟・親子などの組み合わせで飼うネコたちは、示威行為を見せないような気がしています。多頭飼いのケースでも、先にご飯を食べる順位は決まっていますが、けんかして順位が決定していくような感じはしていません。

むしろ飼い主の人に対しては、結構強く痛い甘噛みをしてきたり、かなり強い頭突きをして甘えてきます。これは上下関係を築く行動なのか、違う意味なのか気になっています。今度自分で調べてみようかなと思いましたよ。家畜の中でのカーストを決める要因という発想が面白いので、様々な事象を検討して法則が見いだせるとしたならかなり面白い結果になるのではないのでしょうか。ここまで発想する力があるならば、スクールカーストや人間の上下関係によるいじめの問題を考察してみると良いのにと思いました。すると普通科の高校生にはとても書けない考察文になったと思いますよ。去年のコンクールにこの作品が応募されていたら、一年間かけて論述の理論武装ができていたろうに。と勿体なさも感じました。是非高校生をはじめとする子供たちは、完全な作品を書いてから応募しようと思わずに、とりあえず何か一つ作品を作って、コンクールに応募してみてください。そして作品テーマは一年に一つ一回のコンクールで終わらせるのではなく最初の応募回で指摘されたり、示唆を受けた部分を修正したり、調べ足しをしたりしてより作品の完成度を上げてください。一年も待てないよ。という人は9月よりも前に清書してなくて良いから審査員予定者や図書館員に見せてください。これは少しも狡（ずる）ではありません。内緒で下書き提出をするのではなく、誰でも機会は与えられていることです。

さて、一般の部では「草木の彩り」というタイトルの藍染め・草木染めの事について書

かれた作品に審査員の点数が集まりました。普通のフラットファイルに大島の布を貼り付けて、内容にマッチした雰囲気醸し出しています。十二目綴じ（個人的感想では綴じ目が多すぎます。四つ目綴じで十分。綴じ方に装飾性を持たせたいなら装飾綴じは何種類もありますよ）の和綴じ風にして「和」に関するテーマであることを強調していました。

藍染めのことから始まったので、藍染めのことが研究内容なのかなと思っていると、草木染めに方向転換して、タマネギ染めに流れ、読み手の期待を裏切ってくれました。泥染めの糸が表紙に使われているのだから気づいてほしいと思うかも知れませんが、作品の構成をよく考えると良いですね。日本での染色は万葉集や記紀を見ていくと、なるほどと思うことが書かれているし、そもそも染色のメッカと言われている土地には、なぜその生業が定着したのか。泥染めや藍染めの簡単なメカニズムはどのようになっているのか。化学の染色と自然物の染色の決定的な違いはあるのか？草木染めの様子は単なる実験の写真日記で終わらないように活用すると大人の手本としてなお良いと思います。

藍は畑で育てるのが主流か、田んぼで育てるのが主流か。なぜ「藍玉」を作るのか。瑞穂町周辺の藍染めの「藍」はどこから来たのか？染め物の元になる織物の文化との関係はどうであるのかなどを調べて書いていくと、大人の発想が見せられるのではないのでしょうか。

万有引力で名前はよく知られている、サー・アイザック・ニュートンさん（サーの称号を持っているのですよ。ニュートンさんは。）は、今から1293年も前に生きていた人なんです。この人、自然哲学者であつたり、数学者であつたり、物理学者や天文学者、神学者などの肩書きがある人です。高校生で勉強するあの数学の微積分法の発見をした人です。

そのニュートンが大学を卒業後、大学に勤めます。大学教員の生活に慣れたしばらくたった頃、ロンドンではペストが大流行します。ニュートンが勤務していたケンブリッジ大学や図書館も閉鎖されることになるのです。ちょうど今の世界中が新型コロナの黒雲に覆われて大学や高校、中学校、小学校など多くの学校が休校したり授業時間がとても短い様子になっているのと同じです。この学校に行けない期間中が、後に「微分積分学」の研究やプリズムでの分光の実験、万有引力の着想など「ニュートンの三大業績」と言われるものの基本方の完成と関係するのです。ペスト禍を逃れて故郷の田舎に戻っていた18か月の休暇中に三大業績は成し遂げられました。日常に起きることに関心を持って、その関心から理論・理屈への着想を得ていた彼の賢さは、「アイザック・ニュートンは庭仕事をしている際に、リンゴの木からリンゴが落下するのを見て、彼の重力に関する最初の発想を得た」とする逸話が物の見事に表していると思います。その逸話のリンゴの木は伐採されてしまったようで存在しませんが、接ぎ木で残された子孫が日本に結構あるのです。代表的なのは東京都文京区小石川植物園にあるものでイギリスから日本に来たはじめてのニュートンのリンゴの木です。現在日本各地にあるリンゴの木の多くはこのものを接ぎ木して株分けしたものです。東京農工大や普通の高校にも数多く分譲されています。

「学校にいる時間がとても短い。」とか、「図書館が閉まっていて調べられない。」とか「外出ができなかった」ということを単なる言い訳にすることなく、「できる範囲」ということが実はまだ「できること」が結構たくさん残っている事でもあると気づいてほしいと思います。また来年の表彰式で、おおいに成長した姿を見せてくださいね。

審査委員長・小畑信夫（おぼた・のぶお）